深情
俚言
教訓女今川

信

へ 13
1325
5

源情俚言女今川巻之五

第十五回

爰にまた本町にハおぎんが病も次第におこたりて今ハもとのごとくなりて悦ぶ事大かたならず其の内おまさの産月にもなりけれバ悦び事のみなるゆへ其日のまち〳〵のこ日をかぞへて所々の神仏に祈ねがひとおもくひたすら安産をいのりけりかやうに出入の者ハかくてこれ見舞して志るしのまの御供水天宮さ

松下氷流處藏書

門 へ 13
號 1825
巻 5

まの御作などん坂の内雑司ヶ谷の御礼ハいふもさら
なり子安鬼子母の擁護あらり浅草の観音へハ毎日
の代参をやるのと大さわぎ親ハ目くされ鏡で
皆くまゞしのくと待らかしれるゆへおまへさんハとより
さの処女なればハ身を大切に信心よろづに心だ
きちく胎教あらつに守りおりけふも入来る独活野朴菴
朴「けほどハ道遠ましく顔眉を得ません 香次郎「これハ先生
度く御入来下さりましてそれでこの所いつも外へ気づくお見ふ

かりませんホンニそれ深川ハ亀甸御まいり活ものりいたして
朴「ご至ハく今日ハ御令室さまハいつのごとくござりません
るな 夜「ハイかよわい生れでござりますの御ぎやうさんなりません
おぎさんのやうだとおふござりますれど 朴「ほんにおぎんさ
んハおふハござりまへうお出ちけでそうでござ 夜「さやうサ坂の内へ
参りまする 朴「それハ大でき先ハモシ鼻拭のお薬を
調合いたしました トさし出し夜次郎とりあげまして おくれらかまき ハなきりに薬をいぐり薬のけつきぐる粉子
ゆ亀井戸の御母ハ先日より ござりましてお祝ゐをやく 夜「モシく ちよつとお見舞ましてさるとの入らせ

つゝどうぞごろんじやつて下さいまし せん茶のやうでハ
ござりませんとこのく重そうで薬じやあるまいか 外〽イーヤ
何よろしうござりませうドレく ト おくへ なんど 外〽今の
薬をあげせんじなされつてくトいふに文次郎 よきい薬種を出させ 調合させるにこん
ざいのどの伏まつく調合し来りつらんと合点ぬ思ひあらためみるに何も
かわりしこともなき思ひさうそくせんじさせんとするこれ外あんがもう
とありて中をみせねバなるまい思ひ入ぎと見せるためにもちて 外〽ドレく
来るえちがひと思ひあはせしこと あると思ひたり
薬ハせんじやうの事でこちらへつのまされト手拭の
やうと思ひをとりて 外〽サア是をトのませる なまきいたゞいて是をのむ
ちがんでせんじあけ まじぶらくくするもちろ
なるほどけさ麹町へもまゐせたる事なれバ母もまいりて来てにせ玉を
神仏にいのるやらそのおつのひたるくなるほど上を下へとさわぐ母ハ前次郎を
よび 母〽なぎや文次郎ハごふしたへ 文〽あれハ病気のあとで
お礼参りとそれに安産の形のけもいつ迄よでハ勿体
ないと文次郎をその代参のつもりにつれて堺の内へ行
ましたのおく出さうらモウくるまでござりましたの
いつ出てもきやいの文次郎をつれてまゐつてせへご
なのうござりませう 〽あのやうにもこのよいくるあのね
母〽モシ亀井戸の伯母さんあれハなまきのハおつてござい

まんねへ〽さやうさそふいたしつるがございませうい
まい中の動の手また〳〵ずむやうでございませねへ
（母）〽さよふサほんのそのうごくのぐハございませんゆへ
ございませんねへ〽ほんにそれハたしかで居ませんへ（若）〽お梶と
朴菴さんの居るそふだト世話なく若ゝ内々〽おぎんさんハまだ
久（朴）〽まだしてございませんのイヱ何ともなくおかへりで
ございませうナトよきそふなお顔でいつていの病氣
の身づからこのまゝくコレくそちらの小いほうの薬研を

おくれなさいそう一服さしあげやうと調合してせんじる
（若）〽モウ彼是これるのおぎんハどうしてそのぐらうか（母）〽むすひ
を出しての〽（若）〽二度出しましたのまだひとりも久りません
トいふ内朴あんハせんじあげてる薬をおまきにすゝめる手足をのこまらす
こしまどろこしくのやがてくゝらしむ事をあまりしく顔の色もくちびる
手あしをそのきけるがのついでに氣をとみくし目をつけるまゝ人くちきて
さらぎてくよび活らやら何の大さわぎいなるやがて外の医者もおいくま
事そくらいほうの手をつくしけるまゝそ氣つきたれどもついに流産して
けり若は卵の志んない子をそのまゝおまきハまだ妊娠のつのぬけ色
くいてまくやかしつくこれハ朴菴のたくみにて胎内なる子の死せる
薬をのませしるゆへかくのごとくなりめり是ハおまきをころさんとしてお娘
さてもその事なれバ調合せしなれども毒薬をあたへしくハ若の死ざまと
違ふ事きびしく所のなきなりバそれあらうとれらハ大へんとつねの通りの薬

を合せて夜次郎に見せ今せんずる時に自づまをしてはやまりて死する筆
をあそばしなりこれにて母もきらとあつちのと思ひける所に信公のちとのけ
やらかまきはぞふやら生きそふなる所に抑蕃ちと菌の遠へどもさながら自分の
うらみもなき人を一さんによく見がらましたのまれことごとく申はいやもも
神にはけりそれほどの密人は
なきしる身へ主信にどんて存　信夜次郎の力おとしたまふるにを
のなく亀井六の伯母ちじめ静所の母はなおさら海免
にせんと約せしる身へ気しきやるにはなく太くとおもぬ
力落しを察しやりて親類家内殿川をはなんだなり
なからなりし有き夜なりたやさしらら見はるまてく臨時
中にもあるべきにはなきんのえり未ざりけまいは家内にはみたく

絆儀しうく旦那へはやきたに中男どもの不笛よく
ふこたくく追ひのものを出しけるのがまさはおきとも知し
ざりけりおまさはくらましき目をひらきて「生まして子は
男かへ」「オヤそのいましるるかとなどをかくしく男の子にご志の
もいう子ごとよ気を志つりとをつくて早く起ごもおヨ
「おんせいなよ」「今のおちにまア見せるのも」「ヨく大分にて振
まぐは及へ」「おくまりをあげませうか」「イーヤ今やかてらら
をもつとしてくのよのろく」「どうも及ぶ志はたまごのるま

い文次郎ハまだいふ「おらぢつき おかへりなさいませう
「文次郎より おぎんさんに早く逢ひたいネエ「今まで
ハいつしよに居るから マアそんな事をいはずに茶でも呑な
「身が出来る文次郎どの 嫁ハだらう「アイよいおまさ夜
ござりますからさぞ トいふも涙にむせびぬるぞでおはひ
事を語らしくいふも力を落させじと ちいほうちよ
さいなのりけり

第十六回

却説おぎんハ病のなごりし出へ礼参りとして嫁の里へ
来猜し文おまさが安産あるやうすと文次郎を代参
としてつまつて傍に忠七を供し 般まづしき子出かけ/＼
前に嫁の国に至り神んじろに拝礼しつ 茶屋へ立より
かるかどの乳母などに酒を呑せ遣つていひ付く旅も致
をうつむどの喰させ自分も中食などしてめぐるに
こまなく涙のこぼれ妨びおかの祖師さまよりあやなくしのあり
おくいとこ参九郎しつかのくきよろ流さきまおこ子おか

ほど破ふるく山地より上家を出入りハまさに涼しいの
らあるいハ紀ふと文鎮印をバわ乳母が抱く館ハ給
のらたが卑せおぎんも又もまた眼しながら入りけるが の
中将さんの古稀のきまりに今古年の昔代なるに懐しき
そのそと辺づくまりによく見れバ道なくに日月のあるく
を押さくたるハ勅宣の御手を帯りたる大旅の陣
両手ハあらゆる筆ならバ紋の双を幸き世渡りする
人すらく貴ト者とふものなりけり申にあらぬ編笠を

おぢらくまぶのまに乃ぎしつて三尺四面の様廓を掃へ老
木の松を小ごろくに植りて文字魚鱗子胡蘆をきまて
ゆらくさしもろーたるがのあるきよまき顔ごぎんなるを免
ごぎを無変の珠数のごとくあらくとあきなるこのな
さらくとおしきんぐサア当用の占考お好ごとござれ
バ何なりとミんて進せまうまく景色をぎんごんいた
あく時の得失ハ禍福が鏡に照してごとくなど
ざるト大言によぶとりて居たるおぎんの通りかゝりし

奉納

時しもむかふの方より通り合の小荷付たる馬士が鼻唄うたひ
ひながら此方へ近づきけるが文三なよりハ武家方の行
列を避る岩橋の高通りかゝりて道の傍きに除
あひるをまづこそ両馬ひかへく附落りて一所に蹴合
荒く足などりあがりてたけるゆどにあなあぶなし
と見やるうち文次郎を抱きとりし乳母が足に手
綱のかゝらく思はゞあとへまたくとよろめく拍子に
岩にてつまづきのけざまにころばゞはつと驚く女の

が足を踏はづしてひと先く倒れしがあまりにけよ
る数多の人々馬の高手綱をひかへ漸く気も遠くなり
く伏たりし乳母をいたはり抱き漸くに抱き起
すを抱から主人の男共ハあぶなしとちへとい
きゝ人のうしろに金といへバおぎんハ漸く立あがり
い乳母ごんや文次郎ハ少しも怪我ハせぬかへ（うば）イエ
文次郎さまハなんともござりませんとはくついまさ
くしぐの（ぎん）それハマア気の毒な（乳母）私も旦那さま気づかハ

志くぞんじまく急いで来つてゝご辞らしましなが

見づのうござりいませんから何の真もござりいませんトいふ

ちびらきの二人ハなるほど恐れ入り　ゝのけやう者を見て気の毒らしげ事り　七〽ごぶなさいまし〽おあぶね

へト行き過る　七〽アレごらうじましたるハまだ抱申しくさまり

ませんやうすうござりいません旗極々我人があるとえ

へまくアレあの大経勤　馬〽ときりまづ家のあたりまハイヤ

向ふの華屋が見えません見へ　ぎん〽ぼうりハぶしく葉ひ

げのハせぬそうじが　うば〽ホンニあの人ハコヤどこへ住ふらう

ぎん〽そりやアだれが　うば〽ハイ子るがまねもあぶないのに私ハ

けがをいたしましたごろうじませんを見てのねもく宮子居て

人の見目形さる子を抱てあちらへ人のうしろへ行ま

した　馬〽それハけしからぬ何にいたしても知らぬ人で

ぎん〽気づかひもあるまいけれど　うば〽それでもこゝでみへねと

いふハ　馬〽ハテこのあたりまハト たちさるげハ一人の男たちよりく〽ちいさい子を抱

この男ハちよつとさきに向ふの田の中の道をたりへいつたよ

ぎん〽さくハあの子を　馬〽イヤ是ハ大へんぢや志のしくの子をとる

とつぶハ うだ「ハマアあぶ〳〵いものでござりませう 七「そ
りやア大へんじやうござせへ〆まア遠くハいくめへ其うちが
近けりやハけ辺〳〵を見にあるきやりませう 権「それ
くアノ薮の落を右へ出ると町子の方への道辺がある
きつと〳〵あつち〳〵逃ろうがあらふ 助「いゝつらひなどん
な男であろう〳〵 うだ「年ハ三十位の色の黒くろく髭のた
んとある人でござり 七「ふむよしくそんなら早く 助「ドレおれも一ッ栗
七「以のき屋用ドところへ大勢どつくもふ首ござるら手次

手志くいのう志がやアね〳〵この 権「それがよそのらう トそれより不〳〵わかれ〳〵へ
手こけもうと文人をもやとひなど志つくさがしけ直どとも一向に内吉へ志れ
ねばおぎんがなげきいふばかりのりなく乳母もせんかうつきまでおとこめ
ほこのいさまくことどもも出〳〵をもそこらをさがのしてまづまちつく
まい志れずらばかりくたづねんまハひとまづうつくへかへるさら
まづべつてとくひやうぶなきこける内助〳〵アレさ台ハ京姉ぶしけやうまもあ
志けるやらまひとりのおとこ
たるこそのゝトぼいひつておけば〳〵ぶしやなのぜい 〳〵サアなんぞおこのことござ
らバ逃くまつてく お嬢あさいて地の空殺をとつて空
くのあゝハされてる罪がござるからん世界の中の事
ハ何にようぐ志方ぬ日ハやきぬ ト思ひ案ずるとぎん「アノ台志ふ

たのんで見よふでハおいらへ〜（うむ）なるほどそれまでのよふ〜
うござりませうトちよつとらぬけさるゑさうのたつきやうくうが〜どふぞ
ごめんどふながらおたのミ申まス〜（右）ハイなんでござるの〜（うば）只
今家で大切の御主人の息子を人手に見らさまますたがさるまで
手放ねても遊ふも極手の鍋さません、よくごらんなさつ
てくださいまし〜（右）ふゝなるほど見たくおまへバいまするのさるまで
大分器量人のお見へるやうでござりますがそんならそれ縁ま
よ〜（うば）さやうでござりまする〜（右）お茶年ハいくつでござるう

〜（うば）ハイ当年十一の年でござります〜（右）さやうさたのむ
人の年でふござりまする〜（うば）ハイ亥の年で年番子なり
まする〜（右）ふゝ亥まづその子の家ハどちらでござるぞ〜（うば）ハイ
本町でござりまする〜（右）ハァ当年はいて世忌度当分く
その息子を出しておかげるには中々年中の薬剤など
でハ気りませぬてそれハ本来をきつくらふでご
ざるがのさるくの入用の品もあり依物も入りますし　まづ
私も精をけつさいまいらしてく世話を見らねばならぬま

せんく〽それぐハよほど稽古のかゝりますれバ其内
ほハ又どこへ今の隠居てハ〽なるほどさやうなものでハないそ
しまハ足留の法もありいろ〳〵仕方のあつまりそろ〳〵
出来ますれバ急度出します先達ても芝居子歌ふ事
のござりまく急度その翌日の夕方まハ出ましたへ〽さや
うでござりまするへ急度出来ます事ならバかく拍のうち
ましても〽かくならバよふござるがナント箪笥の入用計り
でも彼是大分手拍のいるのがそれでもそれハ急度出来

時ハいつでもよふござるそし出ぬ時ハ一銭もとり
ませぬのお蔭でござるハ芳町の何屋でござるの〽ハイさ
ようやうでござりまする〽アヽトびつくりさやうのもんなら
手前ハ〽ハイ文治郎でござります芝居の文治郎の仲でござ
いませぬ〽そよしくト志あんのていなりしがやのくそこころから
たつげるまでおんだいよろこび手ほんせいと
やらんのうら在のを志ろく〳〵るうとおもひねるうちすうらおもいハ〽つぶ
ふハ志よみぐなひとつくれますさうくと御けるをやおそ記ため
なさろう〳〵やきいますお内ぐ志ろく〳〵やきいますの〽アイいや
まアうらおもひハ出来やせん急子よんどころない用向

を思ひあまりまくのらまづうらなひハおことまり
だそろく買るまきまつて夏のでもなしまアそれより
よく経ねくら安せ下ハひつてあるがほ〳〵モミくそれでもよし（めきすぎたり）
ぞも逆るやうす初旦へ乳母もみなあふ人ごとも又せんかハ泪
おそのりなそで思ひやられけるハ白者ハこれそこなれどこれ
すなはち曾祢なとゝいふるのみるそのなりお房抄養な
どうねくかむ志をやへけちをせんとうこらひし支あれ
ハ此文盛卯を出さざるなりといつこいすこし梅をよめば

白を好ミく志ありけるに道民業ていのなきさる思ふに
これをとこくなり是ととするるひきし志のあるに時く
こづのら梅を之しお知らく白をたのまれこ道を出し
てハそれ梅をむきおぐるることたびくなりけるをいふもある
のさるぎし時身中のあひぼろにいひつけてそつとこのの
子を奪ひそらせたるハて白をたのまれて金をね
たりおんと思ひしなり志のあるをよく咬にこれ主意
古鹿夜晦卯が一人の子あるくありけるをバ大そくあらば

およろこびそのまゝ隠して志まはんとせり かゝる悪
計のこめぐらして お娘をあんごの仲居に今く目見たのま
世し財宝金銀とうち悦びて行過るさま〳〵どもを
神ならぬ人〳〵はそれとは得さとらずして只商賣して
居る折から宿へ通りかゝり居る者賣のなり左ざめき
ながらいふを聞ばヘヨイ婿公アノ子もすぐそふに経の世
なまいずに抱て行奴（ゆくやつ）はたしかに此附近にも見ぬ〳〵と台
者ごナア（借）ヘヨイそれ一人の男も見ぬ〳〵やうござせへヨくお

世もそうおふのおひ出せねへ（ト〜を吹く）（助）ヘモシ〳〵その娘
しは白木屋の子だいな〳〵（音賞）ヘ〜ちりめんに俗縞邊の
紋所さも相識を着た男さト〜ヘいゝそんなら
いよ〳〵さうきの易者（助）ヘ今一うおひとらせるのもやり
おりあいつゞの子ぎて〳〵みるふこと〜とおりヘいさおあうて
子の支にあきれて調も出ねばおぎんは驚きヘマアど
うした支ぞいらうト〜ヘ（速亡）ヘてあいつに
一ッおい喰せて大切な品をイヤさらふして

いおらましぬトひきかけいだしたる蛇へおめハどこへどこへごころ
このあいつめを〜ほんにこそいくもふしぎくハおらましぬか
アゝおやアも死いた〜さやうしくあの娘めハ悪神大
風ぐ気にしまね〜ひやうたくまでと知つてゐつの血
ど〜イヤく女中ハ又つく既に年なる七ッひとり暮らく
下せく八ッ公を振るこに居くあなたくちつと持扨を替
を背なすつくまつくおいつくなさいませトかぶのごとくに
うけ行けるおぎんがなげきくとゝゝ身をのなく天子

あとこのまゝ地に倒くをかれ身に髪をつかきもつれ狂乱
〜ままなく血ちしり〜ぎん〜まろく何の因果ぐはやうな災
難にあふるぐらうトなきぶのくまの川別てなやうく我子でもある娘
のそまゝにまつしトうろなくぬ大事の子をつまゝる事で
それをくらみてとつくぐふまア生ても死んでも
居られぬるまたしもちよつといつくとゞかふぢらしくえ
へ〜ハトかころをさぶめつけ出るをかんをいるのがくしめて〜まろくおまち扨せを
たくしまくも因じるあのおまをなくして〜涙ませぬ

お男がのふたり先へいつてく　ぎん〽イヤ〳〵きなせへごふぐ生て
ハ抱らるぬる事　うば〽それだとやても　ぎん〽さやうしあなうひ
とうの皿康ねとやすぐハないやうまハえんな生涯擲兒
みもおあんじなさらずよまうくとつと待くごらふじ
ませ　うば〽そふきほんの是がのやくむこふのあの孫子見合
のハ肉の助七ごよ何の因果生死無常ハ運び見合
ハさんよんぐおくれよアレあつちへまがるよ〽ホニヲヽく
宮ぶく　ト　ふすまむこふよりちやうちんをふろしきにつゝみ　ひつつのかぎそ来りしハうちのむんとう助七　うば〽四五代

く〽ごそく〽　むらひ〽ころのあるものゝどんなにおあんじなさる
だらう肉ハうへ〳〵とひつくりかへるよそうどうそれにマア
こんな事に擲ると云ハどふいふ子細ぞ　うば〽なにさそんな
ことじやアねへ　むらひ〽そんな事もこんな事もあるものハア
擲子化さまこのぶけなそうして忠七ハどふしたこのごろへモシ
おぎんさ夏なぜヲヤ泣くおいでなさるのぞおぶしよく何
ハそもあるまマア早くおかへりなさいませナア　ぎん〽ぶしまて
肉へかへらるゝものか　助七〽ヱ肉へおかへりなさらぬとうつちやぶ

しませう八公でぶ〳〵ぞんじマア〳〵そう〳〵旦那さまの
たいそうはあんじて〳〵いらつしやる若旦那さまハだぶなさいまし
た〽うばこふいふ訳でハな〽助七こふいふ訳よりまづ内ハこふいふ
しきいでございましてふ江新造さまのツイ早産をあそバ
つて〳〵イヤもふ手詠もむづかしう〳〵生るとの死ぬうちのれ
ぬ大変まことにモウ〳〵大そうなことでござりますサア落付も附ず
よる医者ハ三ヶ所(さんさい)さまをはじめ与一さんまでイヤ落付
も夏ハよりませぬトいふ手なぞく〳〵そりのぼせあんさんハむね

ははさのへの事ウ〳〵ウミ〳〵とい〳〵目を引つける〽うばサア
く大変でし助さんおめへのそんでこととをいつ〳〵それでこの
らこんな訳でどふする法をとうでマア〳〵茶ハね〽助この茶
ハ禄へのいく女医者のある〽うばそれハどこに〽助たしかの比所と
のいつけ〽うばエヽそれの何になるとものな今のやくには
たゝ禄へ夏をトたゝるきになる此のち忠七も久り番さとも一つい
まえつのらずよんどころなくなき入るわきん手す
うろ〳〵やう〳〵の事かへつれて〳〵くるこのあるそのハこの抄あんになるま
きし一ヶ所九という医学者なりけるのち〳〵思ほうださるる事ハ
次の回にくわしくを
見たまふべし

第十七回

色見えてうつろふものハ世の中の人の心にくらべれん
茶ぎんハさきに抃菴にさそはれたるもふと本町のこと
をきゝてお婦みもやもり立志けい庵の隠居なるよし知る
ものから急に志かしながき心地しつゝ身のうへを抃菴にもふ
かく隠し居たりし思へ何となく恥かしく又のねがく
金之助と六浅のえにしハひとかたならず二世も三世もさだめ
世も末の松山に浪ハおろか<ruby>僅<rt>まつの</rt></ruby>に外のひとゝちぎるまじと

手のこゝろも浅さずとだましこまれ居く金之助ハふ
しのぶやとなりぬるもえんもゆかりぬ中となりしぞ
ものがたりはまてしなしとおもひそのまゝさゝやきて金之
助ハ二方の故人なきバ何事にまれうちとけいるべく
からさんとかたらひ約しつゝ抃菴の許へし金をあ
まく盗出し跡ハ雅となれ大和路をこゝろざしてぞ都
をきけりさても茶ぎんハ婦の内の途中をあくまでのらん
文次郎をうらむこれつ日によりてうせせし文次郎といひ

義理ゆへしきこえ錦子その息ちしきは狂乱になりて
大かたならぬなげきのなしにいくたびも死なんとせしを
漸々に人々きそのしく是を見とゞめ父あくりもあまりは義ね
に人を付のましたりやゝのちく兵家も繁るべきにとまき
肉へかりたまとさなくなぐさむもどもくらん夏ハ面な
けまばさらば兵家の繁もるまゝぐ乞食ともなりてた
づねんとここのましまふく吹入れざるにをくあまし
早速親族のそのま母来りてなぎんをきその一つ

志のまつしく漸々鶯子の母本町へうつりけるにかなきさ
お夏を昼く耳きら才覚にて洞のおぎ方娘のかぎり
消へるなこのりなきけるその後まゝ病に沈みまつり
さ銀のごときに病床となりこともはやふるにすなはて
くなげきぬるもののごとく發狂しくこゝろびはさらぶ
本性もなく進むれどものまゞに喰事もせずたくらか
ことにも文治郎の夏のことばを泣かなしむるに太のに
ならざればなし見聞せるそのなぎんが父の病をおもひやり

ならひなきにせぬハなかりけりとぞさるにこのうちに長次郎ハ
いとゞなげきのますらをも心まどひて此なしにたへで
父に金銀をいと多く人を馳てハ草を分つゝ尋れ
どもふつに行衛の志れざれハひたすらこゝろに思ふやうさ紀
におまさこの事産せしも文次郎の所為にさだめぐ
なげのざりけるも今さらなる露命ハそも枉津日の
神業かいかなるさくせの業報まうくるハ愁の来る
らんと女々敷もくりことしきりしなきしまるぐるなしむハ

いさましかりける事どもなくさるにても此さきの由志いて
も何者なるやと評議さるゝにさらにそれぞと知あり
もなくあり他事ハあらざりけり家にまうし向島のおまさ
ハ誰ぞとなく本町の妾おぎんを呪咀せしなんと今の
さひなしく家にあくじ千里に走ると虎にひとしき人
の口に速かに評判せらるゝまゝけるべからすとて兵八にか
たらひまかくに家を引払ひて此所ハかの吾妻の里
あまなる曽我丸の方へ頼しく幸ひ彼の独身なれバ

氣のねきたる人もなく商ひ事に居そうらふことなり
二人とも世話になり居まするこの頃は持合の金ものこら
ず法のひろしになつてぶり編笠となりて又もやあ
けいのとめてしけりされバはやくも七月になりつれバ
十三日の節季ともなく商人は年に二度の飯なれバ宗も
ありかねもありて結ひやまふ事の屋の繁昌見ル
増ん商ひの手まへりかね彼鐵村つゐに見んおれぬ
上品なる立流の男は見世へ入来る金づくめの経いお

吉力をきめ敢はいづれも志やく布の帷子に帯は浅黄
地の本縞多手任勢松のてなえをあらはし志やの羽
織にきやしやな紋を花浮云ふなどあるべし 堅王謡作 どめ
んなさい 詞 入りゐやい下つぶくめしあがりませ 詞 よろしくは
板橋在の法花谷に飄拓寺と申寺ら集つての菜
種を注文のござりまして 詞 へイそれは何をさしあげませう
詞 よくござりいますそこな書付にしるくつのはされま
しくしト 帳面をご手をとりあげ 詞 是は大そうな支くござい

まだの[illegible]なお年でございますの 譲「さやうさ 全命上人
さまの塔頭のお好みでそれ千代く祖師の御意志の茶
を弘めて 唐土の茶山(ちやざん)からお取寄せまして 逸所塔頭
おまけにつゞく諸方へ茶をつのりなさら 茶種の深山入り
やはりの[illegible]一粒そして此径で三歳も[illegible]まして茎の出
川風でから汁[illegible]ましてござりましたのでも茶種が[illegible]
ぐるりをば[illegible]の[illegible]いから種子もあるつけりの[illegible]
きびしく黄門[illegible]志さまでのお出なされてござくこの

お噺のありまして[illegible]は家宗(かけ)で[illegible]の[illegible]るや
うまいことすと[illegible]人(いんげん)のなされまして 忠「へイ 此寺号は何と
のおっしゃいまして 譲「黄檗寺(わうばくじ)でござりまして 其の[illegible]
忠「へイ なるほど[illegible]まして此所[illegible]積のよくきこえと
ゆるく此所[illegible]ござりまして其のお寺でく 譲「さやうく
忠「それく黄門[illegible]志さまは どなたでございましたの
譲「いつぞやこなたで女中の病気とての何とかの此所
[illegible]をなされましたとやら申ておるまで 忠「へ 左様でござ

いましたのホンニそれハあの村つひお客を取りませ
なんござのへエそれハまやおそのこうさんじまへる　離「その
通りそな様へて悪くおさいまし私へちらひをい
たした事の診方子あつて其の辺まそいつて来りました
うら家事を先へやつて悪しうらのちほど連て来
つくそうし世るく久りましておお金子ハまぐすあげるまい
らへト　おちく出るるいきめふくさ包　うら金子を出せしの又老くるて　離「イヤのちまあげやるおし
拂ひ子をお金がおそのら　忠「イエ取をあげましせつて頂（いたゞ）

きませう　離「さやうならバそういふてそうト　訳の分らぬ遠く出て
あまき夜次郎ハ仕立付を見せ蒼門郎志のものなりをしけるにいづれ草稚を　ぎんこしらくあげるがよいと出子まあり取ゥずおめくお十八味のこらず定
あまちく代金百両支け宅の取之を　そろへて付く取るにはらしすぎて　離「先とくハお世話子なりま
しくト　あがり来　夜次郎立出て　夜「是ハようこそいらつしやいまして私の夜
次郎でございまする　離「ハイそれくハ飄拓寺の使で
堅上離作（けんじやうりさく）とやるものでございます只今ハ度々あがつてお世話
になりましてございます　夜「ありがたふぞんじま
する此度ハ又津山子四五両文を御つけられください

まことに有がたい仕合にぞんじまするなをまするた
けをてらきまして差あげまするならばさへよろしう
おとりなしなされまして御贔屓を願ひまする今雛
私方をおかせあげられまして下さいまして雛の菊衛
老さ母まへ私ハ格別御懇情願りましたがそれの
ことなげく急にお商ひの支度御出来なさると申ハ
御手ぶいしてそのくらい有縁(うゑん)のことでございまする
おまへけさにも御遠慮でございまするの 雛「イヱモウ〳〵

ま上総の方へお出なさいましたか 夜「さやうでござい
ますの其飄拓寺様もたゞの谷中の随蓮寺で先
日御説法の時お見うけ申ましたがよつぽど御老年で
ございまするが 志「アノ継子紋白のお袈裟をめしたお上人
さまでございますの 夜「さやうさ 雛「ハイことし八十二歳にお
なりなさいましたらう 夜「さやうでございまするの時分より
いづれにいたせ今晩ハお泊りなさいまして明朝お立
揃バしてなさいましやうにいたしましやう 雛「イヱ〳〵もうおまゝ

売込んでをるものらさきぐ手がいてまいらしませう華摂

ハ採てくださいましてこの 亭 ヘイのこてらんたゑろへましてお

ぎれも二朱ぞのりござりましてその仲間のら売よせま

しまして残らんたゑろへましてコレ徳やさのぢ手そふいつて

早く御酒をあげねへ 離 イヱおのまひなさいましなばかり

ならさぞお売迎ざらう いつも御繁昌の事ぐら 亭 ヘイ

ありがたふぞんじます 離 是ハ手法方へ挨ひをいたして

又あとをこちらら計りでるでハおしてハでるいのら

芝の玉川屋もこんな勘定さてましてく気つてく金子が

よほど不足でござるから あちらくで寺でおでたし

ゆゑてやつていらしたい 殊まつれてまいつて家来を急

に腹痛がいたしますとゆふてよんどころなく芝ま止宿て

気つてから お世話なからたしこのな人をやとつてくれから

とぞんじて不足でござるから是を持せる人を又附ておくれ

らぐお世話ながら慥な者代を一人私といつて下まつの

ハさ迎てくださいまし その人手代金子をさてぐ手おでたし

中ゟでのら〳〵（夜）ヘイそれハいつまでもいろ〳〵ませうご今晩ハ
お酒りあさいまし〳〵（離）イエどうあつても久りませんで
いそ宜しく御参詣の菓ハ明朝から祈念ご振りまたら
ら今から久しくも案じますまいせん御貴人も待のねて居
らましますのらおやつらいながくきやうていゝしく如ら
ひかます安う〳〵（夜）いのち夜それでハヘイ陸から御送り申させ
ます安うさやうならば忠七さん振殿父さそふいつく御待し
く行やうそれとご宜しく七助でも内へ帰る其の手筈

をまうしせく一ツ承りやらッせへ〳〵（忠）ウントまりましてだれで
モひとりつの兒しませうそう〳〵久りさ山井用仙さま
アノ小児医のなんとこの中まして〳〵（夜）跪和安伯さま〳〵（忠）さ
やう〳〵ございますどうぞく板橋の迎立でございますから
あの女房へつらう〳〵思しませう〳〵（夜）アやつてもだめごの
それもよくのろう不足ながら〳〵（離）イヤおまなくば一人も分くいゝ
しらい今日のものを持て行うト　甘酒屋出て父め　なとばいゝくそこおく
おけるそのうち忠七傍来りけまして〳〵（離）さやうならば又お世話する
よくいひ付て支度なでしく出かける

でございますやう始て参つてこちらへまゐりなりまして

友「これハあまりいそぶりで何のおと無事至極

でござりますおそれ入りまする 離「イエ何ハ今年ハはやく

まして今年ハお渡し申ませう 友「へイ如何なる事でハございませぬ

お席まいつできますにもよろしうございますのお送りな

どら落しますす此度ハ時分がらとて手廻りの様まする

から何事もよろしうおまちのしひ頼ひまするとハ大きな

あとのこころざんじますもたうりなのら此院をさする申

よろしう任せられまして トいとまごひする是より立出る 忠「ほんに

つひ気遣まして御心付ござりませなんぞお気がるを申付

ませうの子 離「何事なく此しなのら気がるほうがぞそれに

よるのもありますのら 忠「さようでございますのト おもてまで

候是より立かへる

此時之離縁ハこのト者ニ変じて文理卿をとり

たるとそのまて側ハ曽孫丸なり又りの兵ハ女房

なども同居して居侍しかるるがかつりいまくろふけける

なり墨と離作といふ名もさくり上作といふを別さく
絵に紀につけたるかくくのごときふ屈ものなり
りその妍蟹の妙なる章一段の條子識を見たまへ

第十八回

忠之清ちぢめ外二人とも離作が弟子つれと急ぐまゝ
ふく袖なく板橋の片岳なる法苑谷にいたり飄招
寺の山門を入て本堂のひだりなる右の方の玄関
の前にて 離「案内をこしの間待て居て下せへ 源「ハイ

こまりましたトげんくわんにまつせおる紀付同一人ハ板橋の医しや
山井用仙と號和安伯方へうけとり手回く忠之清
ハ弟子ともいふべきものできものとく其の名をもいつて玄関にひかへ居る
やかて離作の男神丸ハ家くロより内に入り板えんに手をつきて
曽「ヘイごめん下さいまし 今の男「ドラレト出て障子をひらきて 若「ヘイ私
ハ深川から参りましたがの和尚さまにお願ひ申まし
たい義のございまして 男「ハアちくと待ツしやりませト奥へ入る
の衣忌まる子侶出て来て 和尚「院主ハ風邪にて引籠つて居ますれバ何の
御用でござるか後まへ御伺ひ申てよろしくハこちらへ
お通んなさい 曽「ヘイよろしうございますまづ御免下さい

まし ト そらどをとる 子僧ちんば「甚内お洗足の湯をあげさつせへ ト はちあおり
ろくあんなまつしく親しきたる役僧とおかしき僧両花三人皆出て 倍「どれからでござるな 音「ヘイ私
ハ本町の薬種や玄番や黄理卵方の手代の捌でござ
いまするどの 倍「コレ/\早くお薬をあげろハアそれで
曽「ヘイ急ぎ此抹椿を頓ひましてございまするとり
まし此の恐しい四霊人さまの仏前にもいらつしやい
またならバなをしさまでもよろしうございませんので
うぞ頓ひまするト 住持中より小判三ひら紙につつみたるをとりいだしうやうやしくひろげ出し 曽「是

ハさしやつてからお供物料 ト出す 倍「ハア是ハコレ/\お
薬子をなぜ早くあげねへ ム、それハずぶいふ事で 曽「ヘイ
狂気いたしましたあまりござりまするどの時分ので
ございましてこまりまするまでいぶん仕せられ/\ませ
しても拾利かでもございませぬから、よろしうございま
するどの帳面などのそのりのねまする義ぶの一寸御書
とかくらハ役の番役でございまするのらそめでと
まのせく恋まして四日ごの時分ので子なりまして

難渋つのまゐりまする全体アノ當門跡さまの
おもてづゝあなたで御影様を被ひまするでござい
まするその御尊慮の御妙策もございますとやことで
それらをいたさずまするならバ追々懐方もつのまゐり
ませうかとぞんじまする頭く主人のあがりまする害
でござりまするの敬信ながら財宝のらくござりません
るのらぬ失礼を入りませぬ候子やら被ひあげま
するまゐりござりまする又段めまするかおれ手ハ荷次郎

ご気遣仕りまするでござりませう 信 ムヽそれハ御迷惑
ござるほど御志ハ屋ハ皆成んでハ大家ぐござるたら
お宗旨であつたに 僧 さやうでございまする 信 ムヽ其儀
人ハ 僧 左様なさめつきまして 信 ムヽいかゞなるで
僧 へイぜんたい御宗旨はぜんたうでございまするのチト財
かのうて入手なげられまして自分の不宿るでいやとまふ
されませぬ氣性ゆへ手あらく資金が出来まするくせ
きでござい至まするそれのおゆたちませんらくのぐ

夜深卯之へ中俵のないくと志づり若党ニ仕り
ましてこりましたその思ひ法いと気ミ宿のやうな
事ましてそのいよく乱ひでござりましてくこまり
ますル人さへ見ましてると金をとらせの儀をさせのと
人の見きらひ差別もなく至極な事を申ましてま
ことにこまり入ましてる(曽)へいのきあイヤ至旨ぜんたらの
事でまていさやうの病なくば今の内利積いたした
ならば随分あんまりますう殊(こと)ニ前山ニ祖師さまの

御夢想の妙薬もござりますれば進ぜましやう志てのをさ
ぐすり国云やうにいゝ忘れまして事ではござりませんが(曽)へイエそれ
ハ何よりでもどの病ひましてトたつて玄関へ出(患者ニむかひ)(曽)へ大きに
まちござりまして今夜頃のちよつとよそへ参つて
のぐ時分がらお待せ申ますドレそれをこちらへ(トくの薬種を包ける人と)
(こなれの薬物を受取くすりの方へおこと)(曽)へ是れたくへちよつとたのまれまして患者ニ
とゞけまする薬物でござりますのでちよつと御生所へ
行て参りましてその病人ハ御玄関ニ居ますアノ年

の生ましな方でございましたのよろしく取ひまする
どうも今さら見まして催促(さいそく)だより恥しくこまりまして
るで、なまじつくださいましてもよろしくございまするか
あのるべく取ひまする　僧「何の人手持せてつかはしても
よくハ御伺ひ遣しましこの方からつかはしませぬ　曽「イエ外
ま偽ものもございまするから　子僧「角内おまきものをあげ
ろトこれより多の薬種をひつさげそろぐて出てゆくやがて仏前よりいそいそ今つなどよろしいものゝ衣代役僧玄関へ出て　僧「サアおま
へあちらの本堂のほうへおまいりなさい　忠「ヘイこれハごめ

んなさいまし　イヤ役僧なから金子をいたゞきまし
たらバさぞくさ取おいと申付りましてぞんじまして　ふところへ入れかひと
かと　僧「ずいぶん金子もあげるから本堂のほうへおまいり
トいふまに先なら　おどろくもうろくして　忠「ヘイあちらでございまして　この　僧「さやうさ　忠「ヘイ
く是ハトいひつゝ本堂の縁　がとまを縁をかけろ　僧「サアこちらずをぞろくおまいり　忠「エ
おそれながらそうまうしハおりません　庭も狭もののほどの
気こみましておまいりましたから薬種の代金を頂戴侍
まして、さぞくおいとまつのまつりましたら　僧「イエ薬種代

もあげよふけますどマア此新様を志くらの事でのよい
忠信ハとうけ なられをく 忠 ヘエ〳〵 信 ヘエ志やアね ヘサア〳〵 子信 なんのつらつきで
こなさまやア杭つきたらあまい事じやア御座りませんぜ 信 アノ
人ハそうまそうなそのぶうまふ事ハね〳〵 付ゐるがいてコレ
其葉種代もまづよくお祖師さまをおがんで包をもちを
よくしろくいのなくてハ手通りでハやくにたゝぬハ 忠 ヘイ〳〵
是ハまつぴらごめん下さいまし アノ壁を離作さまハど
ちら〳〵お出なさいまし 子信 〳〵 なんのるすごころさやア夫

笑ひごと 忠 ヘイどうも百姓ごーとすれ大金をいたゞいて
持ましてハ財ぶがふでハござりますし 連体も業じら
早まりましたら お旅りまするならバどうでさくさまへイ
久りましたら 子信 コリヤア忍びす様のやうな咄しでこのねハ
渡ハおあぐのりよ イヤこなさまやア口ハ志やアいのね 信 コレ〳〵
子信よ行ヘいつて角内や惑内が部屋へもそういつて
こんなつれてこいコレさむらひどもを呼べそしてく志ずる
おいく 子信 ハイ〳〵 こいつハ面白いサア〳〵ト さわぎたちてたぜい中 げんさむらひなどあつまりこの

まろくらの侍のそのゝごさるぐちをうまつにきもむこのりつぶしてある忠三清を
むりむさいまたうのほか手にくちてくちバほぬぐひあてゝくてしてもむりかゞグッ
くといふをよびのやうにひつくゞめて本蔵さまの並へ出してそのまゝにてく大ぜいの
坊さまおあつまりてなきやうをよむ侍のそのゝの後をたちてくさまざま本中
げんの山のやうな大男ほかへくるまてく新屋へさつきといきねうまでにして傳(さて)も
おく大さうさぎいなり忠三清をとより正気なきバまぢくしてくわる侍
本町にハその夜おそくなりてくも板橋へ出きたるそのうへ
早来ざりけれバあんじて又ゝや迎ひを出たし又板橋の
医者のうけ来て行たりし男も清範谷へ入り見るに甚
清ハ志ぞくらまてく死るあときもをつぶし一ッそくさんに本町へ
入りかくとつぐるに惣兵衛驚きてゝ又迎へ人をつかハしけり

ほどなく夜も更て鶏鳴(けいめい)のころおひに忠三清と迎ひの
ものと侍のそのゝも一同に伊勢一人たきて本町へ来りあ
離作とひふての不届そのかくて又忠三清ゞの志ぞら
也本蔵さまの前にさへらまれ祈禱さまし夏まぐ
そのゞ有り忠三清をバ志ぞゝくあてりの薬屋にまかせ
無く下屋りよびことするに萩次郎もはじめ人々大きにおか
どろき家内も大きに仰天(ぎやうてん)しけれどもかくてハ果じと
何れも勇へハ明日段めてちゞけ合中すべきむねにて使

僧をたのし親類も見放ひとしく出家してけり
弟子つぎたるまねひなりけり家にまして法花読誦
の善門大徳ハさきに三綱を偏歴し又をやけに侍る
のちに入来りかひあまたの道俗を化度し七月十四日の
朝この瓢秘寺へ入其のふにまづむかふべの大衆をとその
たりけるに行者法ぐくうちゆくらなづきてあひやの
く壇場にむかひて修法しくひらすら悪人をいまし
めぐらくその罪を滅せさんるを丹精に祈念した

まひけりかくて曽祢九ハ急ぎ湯湧なる家に入
みな上前尾なる物読しくて味噌をあげかのうけたる菜
種を見せるに与八が母も大きに悦び此にて文次郎を
うすびたる手ぎるにおとらじとあまたたびらんしし
与八が菜種を見きてしろくおとこの為めハ百六八夜侍ぶ
なるほど餘ハ餘所など遊ぎて高價の鼻をたのくし
何ぞ明日ハ今にしてまづぐっと二丁ほど出て山口邑あたりに
足からりの様へらりのモシよく来きたてやいやの悪説

をうつゝヤンヤといふもぬけまやア寒に胃がなれバ仕て
うごきめぐらぬせる神あれバかゝる神ぐいなどいひて
夜ともすも不呑ミあの一品ゞ肴をとり寄せて大ざやれ
ふく夜ふるが其のつぐの日いつものごとく朝寝しおきて
御出ありとおきて飯をつきなどして二人を起さて与
八ハやがて起出ぐれども曽祢地ハふしぎや足いつこ不
たゞずおきいでんとするに足をひく事あたはず手も志
びれて一向うごかず是ハふしぎと思ひいつはれどもせんかた

なく与八ハ是さへあまりこゝちのよきなりとかの草稚を
ふくらぎ何もさへ今さへあれバとて出たるがさすがにきつね
などに化されたるごとくに行先一向にそのくびに奈ふ
砕たる人のごとくたゞに正気を失ふてむやミに歩けりて
ありけるに誠に大乗秘法の修行に悪徒たちまち真
罰を蒙り曽祢地ハ番外の索をとりて縛せられ追ふ与
八ハ首中になりその瓢松寺の表門より境内へかつぎ込ミ
玄関へ是をおろすに行者ハ化すに八郎どくらうくいまるめ

させ奉りへも志らせける程に夜次郎も親共もつきし
そひて入来り若年も過しまゝにその霊験のいやちこ
なるを感じ拝し文字信心いやましなり是迄の十四日の夏
思ひ出し事共やくも板橋までめ道中へ迷ひて参詣の
人々家もくと山を出でなりにける見世の役人方より
くもこれを聞て寺中へ申入られ与八を呼出して門前まで
いましめつ術にて縛られて杖棒を今日へて岩重に世話ありと
ひかひてのことなれ共悪しき事もなく状する事に悪事を

なくせし人をとらえ捕へられるはまづ掛沼野抄庵に
世の妙法蓮華経も好きいふも又なり八巻寺の門まで
まゐりのことなく召捕られけるは志とどの菩薩にたへ
のね其事悪事を一つにまとめ状させ夜次郎始め親共も
召出され其様へのことなれ夜次郎へも之に申されまた
に文次郎をよびだしてこれ迄たる所共もことごとく拷問
のうへ申せらる免許しに是もつゞのなく夜次郎へも之に申され
たりしかば人々の悦び大かたならず又さきに道にて風

俗兄若しきとらく金之助ぢぎんハ召捕られたりしを
囚(ひとや)につながれたるが是もけふ引出しくかのく悪者どもハ
それぞの科をおふせ罪さるべき事を普門行者とひ更
ゆるく草庵ちかづき金之助ちぎん曽祢元などハ格別の
不便の事是ハ行者の厚き情より剃髪させ皆く
遍国にハたくばむまじき思ふく遠く是を放ちやり
けり是志のしながら懺悔(さんげ)して罪障を滅しさせのふ行者
の大慈大悲ゆなり又此行者の呪法(じゅほう)ゆくくちぎんも早速

全快しなまきもすみやく那ゑくことより速志にお
見けれバ親類こぞつてその大恩を厚く報謝とし
く境の内雑司ヶ谷池之をはじめ法花谷へも寸志の茶
種の代金子三四倍増しらく年の石壇(だん)の修理(しゆり)その外
法堂の修覆等の施主となりあまたの奇特(きどく)なし
先祖の追善ハ行者に頼ひらく大施餓鬼を修したり
けり行者ハ久しく法花谷に逗留志ありひらく廣く群生(ぐんぜう)
を度(ど)しのひそれより上毛(かうづけ)の沖原といふ所に法花堂有

く家も祖師の説法の地なれども結縁うすきもたるを
きらく人の志うねバ枝を曳かひく説法あり又ば逃き
まうりの後漸門ハ俗ニ人溺死といふ毎年夏より秋の
あまいたり人の溺死せざるといふ支なきをけ川辺なる
中辨の里ニ法花堂と云ふ有縁の地なれバ宝塔
婆を立のひ死せし人の追吾志ねんごろよりその功力ふ
て亡霊仏果を得たるそのその後人溺れざとなん
さるもそれよりほどなくかまきも懐妊て玉のごとき

女子を産又なぎんも一子をもうけたる男子なり
けれバ是を類所のあととりとて家ハ次男子宝さこのへて
仕合よく出店何十軒となく是を昔ニ十倍させる大家
となり家内上下睦まじく自分ハもつぱら家業をつとめ
給その余力にハ風流子を招び茶の湯を一二なく好し
むまの羅光通里廣里など会しくハ一着表歌を詠
ざれバ浅草六樹卧竜の園中ニ雷鳴し俳諧の一句を
吐けバ雪中蒼ら雄麗の諸宗匠も口を揃はぐみ

その外香筵蹴鞠などに狂興はあれども溺れて業
をおろそかにする事なくたまたま氣ばらしに出かけなバ
柳漁春梧松暁硯孝の諸友人と筆墨を運しあ
る時ハ揚柳橋下の舟を東に飛して小里の雪見の
楽しミハあれどもあへて遊びひろく深くもあることなく
なく家業身一つにつとめける恩寶ハ泉のごとくわく
家富さかえて金の山をつミ重ねなをあまたの子
をまふけて目出度暮しけるとなり善人ひとさびう

主ひのあるハ前世の宿業一時に出来て後に長く
楽しむなり見聞の女子かまへておぎんが心を慕ひ
て善に志しみおぬ姫をおぎんのなり行を見て内に
自ら慎してたまたま古を寫す今川の流迄もおかぐ
家をみて目出度栄えぬるべし

教訓女今川巻之五終

歌川國直筆